

企画展「織る×編む シタイキ・オシケ・テセ ～釧路地方に伝わるアイヌ女性の手仕事～」を開催 (2020年10月3日～12月6日)

城石 梨奈*

この企画展では、アイヌ女性が伝統的に担ってきた「織る」・「編む」という技術に注目して、これらの技術によって製作された民具約20点を展示した。さらには、釧路地方で収集された当館所蔵資料を展示することにより、製作技術の地域的特性を探ってみたいというねらいがあった。

ところで、アイヌの歴史や文化を展示という形で紹介するには、実にさまざまな切り口がある。アイヌ民族という人間集団の全てを対象とするわけであるから、当然のことである。博物館で展示をする場合、基本的には館の収蔵品を基軸に展示を組み立てるといった条件はあるものの、さまざまな可能性があるのである。私が当館に学芸員として着任して4年間、大小はあるものの毎年何かしらの展示を企画させていただいてきた。1年目は、「最古級木綿衣」という1点の資料を紹介した展示、2年目には、アイヌ文化におけるイラクサという植物に焦点を置いた展示、3年目は、国立アイヌ民族博物館PRパネル展と同時開催で「アイヌ盆」という1つの工芸品ジャンルに着目した展示、そして今回の技術史に着目した展示である。

どちらかというと、美術品的な資料の見せ方による「工芸品展」で展示の経験を積んできた私は、資料1点1点が語るものをじっくりと受けとめてほしい、という思いが強いのだが、技術史の展示となると技術自体の説明を詳しくしないと見る人にはなかなか理解していただくことができない。そこが不十分であったことを自戒している。とはいえ、担当者の知識・勉強不足のため展示で説明しきれなかったことを、専門家と製作者の協力による関連事業で補ってもらおう、と企画したのが講演会及び体験講座である。

前置きが長くなったが、以下、本稿では展示及び2つの関連事業について概要をまとめてみたい。

【展示】

「織る」と「編む」という技術の違いを明確に説明できるだろうか。一般的な辞書を調べてみても、実は曖昧なところがある。本展の冒頭では、その技術史的な定義とあわせて、アイヌ語での呼び分けを紹介した。展示タイトルの中にあるシタイキ・オシケ・テセがそれにあたるのだが、アイヌ語では、織る・編む



タイトル・バナー

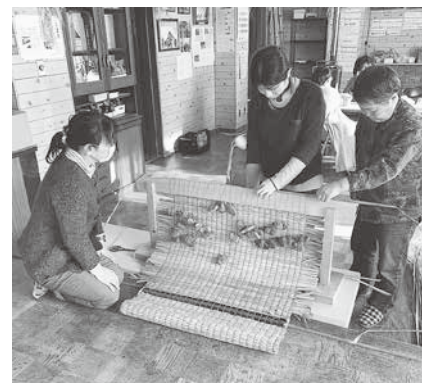
という2種類ではなく、製作する対象によって使う動詞が異なってくるのである。

展示の前半では「シタイキ」によって作るものの代表である「アットゥシ織」を紹介した。アットゥシ織の着物のほか、製作に必要な道具である織り機、製作の様子を撮影した映像のほか、アットゥシ織の文化史について文章や写真で解説した。製作のドキュメンタリー映像は札幌大学が2016年に制作した約30分の番組であるが、二風谷アットゥシの作り手である貝澤雪子さんの製作工程やインタビューを含む作品で、熱心に見入っている来館者の姿が多くみられた。現在アットゥシ織は、平取町二風谷を中心に盛んであるが、かつては釧路も道内有数のアットゥシ産地であった。当館所蔵のアットゥシの中にもおそらく釧路地域で製作されたものが数点あり、今後の技術復興の手がかりになるのではないか、ということをお示しした。



アットゥシ織り機

次に、「テセ」によって作る道具。「イテセ」とは、直訳としては「それを編む」という意味だが、ゴザ編みを指す。ゴザ編みには、ガマなどの植物を材料として用い、「イテセニ」というゴザ編み機を使って製作するが、現在も儀式に欠かせない道具の1つであるため、技術伝承は比較的広く行われている。今回、製作技術についての地域性を明らかにすることは十分にできなかったが、呼び方について気づいたことがある。ゴザには、無地のゴザと赤・茶・黒などの色によって幾何学的な文様が入る花ゴザとがある。無地のゴザは普段使い用で、花ゴザの方は室内の壁の装飾や、祭壇の一部、儀式中に祭具を置くための特別なゴザとして用いるという使い分けがある。そして、道央などでは無地のゴザをキナ、花ゴザ



ゴザ編みの様子

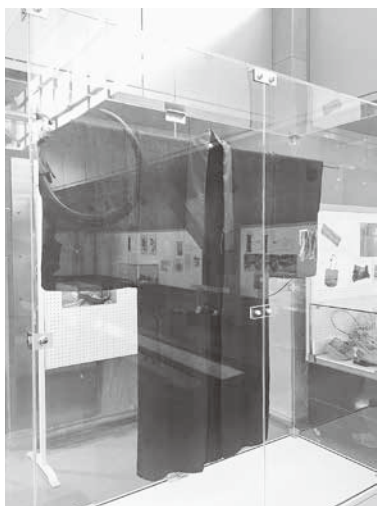
をチトラペと現在は呼び分けているのだが、釧路地域の記録では、用途の区別はあるものの、無地のゴザも花ゴザも「キナ」と総称しているのである。その理由までは考察できていないが、そのような発見があった。

「オシケ」によって製作するのは、サラニャと呼ばれる編み袋や、刀掛け帯、荷縄などである。編み袋は、サラニャと一言で呼ぶには実に多様な素材・形・製法があり、今回展示した5点のサラニャも全く違ったタイプのものであった。地域による違いもあるが、個人レベルでの特徴もあると言われる。刀掛け帯や荷縄については、経糸や緯糸の本数や素材、パーツの取り付け位置、編み方によって時代や地域の特徴があるのが面白い。展示では詳しく伝えられなかったため、この点を講演会でご紹介いただいた。



様々なサラニャ

最後に、情報は少ないが「染め」の技術についても触れた。アイヌ語では、「染める」という単体の単語を用いず、フレレ=赤くさせる、クネレ=黒くさせる、などと具体的な色にさせる、という言い方をする。このコーナーで展示していたのは、藍染めと思われるアットウシである。多くのアットウシは、オヒョウやシナといった樹木の繊維そのままの生成りの色であって、本資料のように染めてあるものは割と珍しい。藍染めについては、蝦夷大青という北海道に自生する植物を用いて行っていた可能性が指摘されており、当館の藍染アットウシについても、今後の研究によりどんな素材によってどのように製作されたのか、明らかにされるかもしれない、という期待をこめて結んだ。



藍染アットウシ

【講演会】

10月24日(土)、北海道博物館より研究職員の大坂拓氏をお招きし、講演会「製作技術から探るアイヌの編物-刀帯と荷縄」を開催した。大坂氏は、アイヌの民具研究の第

一線で活躍しておられる研究者で、これまでに幣冠^{へいかん}、荷縄、刀帯、編み袋などの悉皆調査とその調査データに基づく詳細な分類をまとめられてきただけでなく、ご自身でもそれらの道具を製作してしまうという大変器用な人物である。作り手への聞き取りや、文献調査もしっかりとなさっているので、さまざまなアプローチで導き出した仮説も説得力があった。ご講演の中では、今までに出会ったアイヌのレジェンドたちに関するエピソードも紹介してくださり、製作技術という多少専門的で難解なテーマではありながら、聞き手を飽きさせない、充実した講演をしていただいた。特に、忙しい現代社会において伝統的な手工芸品の技術伝承をしていくなかで、いかに速く作業を進めるかという工夫が編み方の変化にあらわれている例のご指摘がおもしろかった。



講演会の様子

【体験講座】

11月21日(土)には、阿寒湖畔在住のアイヌ文化伝承者・床みどり氏による体験講座「木の皮繊維のお守りストラップづくり」を開催した。アットウシによく用いられるオヒョウの内皮繊維をカエカ(糸縫り)するという作業が、初心者にはもっとも難しく、時間を要する。そうして苦勞して作った糸に、アイヌ文化において魔除けの植物として用いられてきたペヌツ(イケマの根)やビーズを編み込んで作る「お守りストラップ」を製作した。小学生から80歳代まで、幅広い年齢層の参加者13名が挑戦してくださった。ものづくりに没頭する時間は本当に楽しいものであるし、何か1つの作品を作り上げた満足感を感じてもらえたように思う。



完成したストラップ



講座の様子